

「空の下に 自在空間」という
キャッチフレーズのもと、
新しく誕生した『ミューテリア』は、
居心地のいいプレミアム新空間を提案いたします。
今回は、日本のガーデンデザイナーの
草分け的存在である
アウトテリア民園の井田洋介さんに、
空の下の空間を
いかに居心地のいいものにするか、
その極意を語っていただきます。



株立ちの雑木で奥行き感を、石組みでシャープさを出した新和風の庭。



「より自然に」が居心地のいい庭づくりの基本

井田 洋介

空の下でつろぐ縁側の空間を 30年前にデッキやテラスで提案したが

私の店は「アウトテリア民園」といいますが、この名前は、アウトドア+インテリアを組み合わせたもの。内と外をつなげ、庭をもっと快適な生活空間として活用する、という意味からつけたものです。

内と外をつなぐ空間といえば、日本には古来から「縁側」がありました。ガラス戸をはめれば温室になる、開ければ戸外の人と世間話ができる、夕立が来ても洗濯物をさっと取り込める。縁側は、そういった多様な便利さももった素晴らしい生活空間でした。

店を始めた30年前は、洋風住宅ブームで、「縁側」的なものがどんどん失われていく時代でした。そういう場所がなくなるのももったいない、外国にはそんな空間はないだろうかと思って探してみたら、デッキやテラスがあったのです。で、当時デッキやテラスを採り入れた、アウトドアリビング的なエクステリアを提案しました。

しかし、30年前はまだ抵抗がありましたね。「そんなの雨ですぐ腐るんじゃないか」「外で団欒なんて」などと。

ところがその後、海外旅行でヨーロッパのオープンカフェなどを経験した人々が、表でお茶を飲むことは素敵だし楽しいことだと気づきはじめ、庭でつろぐことに抵抗がなくなり、デッキやテラスもだんだんと浸透してきたのです。

リビング的な使い方だけでなく キッチンやベッドルームだって可能

デッキやテラスといっても、必ずしもアウトドアリビングとして使うばかりではありません。そこにキッチンがあってもいいし、もっと進んで、ベッドルームとして使ってもいいのではないかと思います。

すでに20年ぐらい前にそういう写真を見たことがあります。アメリカのリバーサイドの別荘で、庭の一部にシャワールームがあって、その横にベッドが2台置かれていました。そこまでいなくても、広めのテラスがあれば、その一角に昼寝ができる場所をとるぐらいは容易だと思います。

余談ですが、店は湘南にあるのですが、この地の方々は海外生活経験者が多いせいか、先進性あって、新しい提案に対し

て反応が早い。デッキやテラスの提案も、海外で当たり前でデッキのある生活をしてきたため、早い時期にすんなり共感して採り入れてくれましたね。ハンギングバスケットも、素焼き鉢も、たぶんうちから始まったと思うんですが、すぐに使ってくれました。そういうところがとても面白く、現在に至るまで、私自身の刺激にもなっています。

居心地のいい庭をつくるための 「機能性」と「自然感」

居心地のいい庭をつくるために、私がポイントとしているのは、「機能性」と「自然感」です。

「機能性」というのは使いやすさや動きやすさ。ガレージなら動線がスムーズで出入りがしやすいとか、デッキなら木陰になって快適とか、そういうことです。

たとえばデッキやテラスでも、ただ庭に板を張ればいいというものじゃない。デッキには手すりがつきもの、とばかり漫然と手すりがついていて、つけないほうがいいのというものもあります。狭すぎて使いようがなく、これならむしろないほうがいい

のに、と思うデッキもあります。要するに、使うときの環境もサイズも考えていないのです。

設置場所にしても、カンカン照りのところにつくってしまいがちですが、そうすると使える時期が限られてしまいます。居心地のよさを保つには、そばに木があったり、デッキの中から木が出ていて木陰になっている、そういうことが必要になってきます。

2階のリビングにデッキをつけた場合、その下の庭が死んでしまうことがあります。そういうときは、庭の木やつる植物をデッキまで誘導して、2階で庭の緑を楽しみ、下の庭は整備してガレージとか遊び場にしてしまう、という方法もあります。

さらには、どう使うか、お茶を飲むのか、椅子やテーブルなどの家具はどうするか。広さは？目線は？「デッキだったら椅子とテーブルを置かなくちゃ」と決めつけるのではなく、あまり広くなければ家具など置かないほうがいいし、たとえば座布団だけ置いて和風に使ってもいいのです。そうすれば、狭いデッキでも有効に使えるでしょう。

また、ちょっと庇があれば、洗濯物を干したままでも出かける、そういった利便性のチェックも大切です。